
I S ――怪物殺しの英雄――

西口 純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS——怪物殺しの英雄——

【Nコード】

N0058Y

【作者名】

西口 純

【あらすじ】

ある日、葛城桐葉の元に郵送されてきた差出人不明の大きな箱に入っていたのは趣味の悪いネックレスで……

ISの二次創作です。

一夏の幼馴染みというありきたりな設定、更には駄文ですが、それでも構わないという方はどうぞ。

主人公設定（前書き）

見返してみると原作キャラの設定を組み合わせた感じになってしま
ってる……

主人公設定

葛城桐葉 かつらぎ きりは

身長・体重……163?・54?

血液型……B型

誕生日……1月25日

イメージカラー……ダークグレイ

特技……家事全般

好きな物……洋菓子・紅茶

嫌いな物……不条理

天敵……凰鈴音

肩の辺りで切り揃えられた癖のない黒髪に、やや幼さは残るものの均整の取れた顔立ちをした少年。

葛城製作所に所属するテストパイロットで、専用ISは『櫛名田』くしなだ。

織斑姉弟、篠ノ之姉妹とは幼馴染み。

両親は四年前に失踪。現在は年の離れた兄と二人暮らし。

両親が失踪した直後は塞ぎがちであったが、ちょうどその頃に転校してきた鈴の明るさと、同じ境遇の織斑姉弟の前向きな姿勢のお

かげで立ち直る。

彼が所属する葛城製作所は国内でも随一のIS関連企業であると同時に、親族が経営をしている。

要するにお坊ちゃまである。

しかし、経済観念はそこらへんの大人よりもしっかりしている辺り、両親の教育の賜物だろうか。

ちなみに、彼のISは篠ノ之束が葛城製作所からハッキングしたデータを元にして、468個目のコアを搭載した第四世代相当機。織斑一夏がISを動かしたというニュースがテレビを賑わす以前に、彼の手元に待機形態で郵送された。

第一話 日常の終着点(前)

高校デビュー。

中学三年間を暗いヤツとして過ごしてきた俺にだって、高校三年間くらいは思いっきり青春を謳歌したいなんて夢を見ていた時期があった。

だが、現実はそう甘くない。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR《ショートホームルーム》をはじめますよー」

振り分けられた一年一組の副担任、山田真耶先生やまだ まやが明るく声をかけた。

しかし、クラスメートたちは無反応。

山田真耶先生はおっとり系の美人で、彼女の微妙にズレた黒縁メガネがその印象に拍車をかけている。

おどおどした雰囲気ので実年齢より幼く見える感じだ。

これからお世話になる副担任が、こんな可愛らしい先生である。普段の俺ならそれだけでテンションMAXなのだが、全方位から重圧シヤが発せられているこの状況で声を出すなんて勇気が俺にあるはずもなく。

結果的に、俺も先生の言葉に返事をすることは叶わない。

チラリと後ろを向くと、女子と目が合った。

慌てて視線を逸らしても、その先には女子。

女子、女子、女子女子女子……

クラスメート総勢三十一名中、二十九名が女子。極め付きに担任

も、副担任も女性というオマケ付き。

男子は俺の前に座っているのが一人だけという中々に惨い状況。唯一の救いは、その男子が気心の知れた幼馴染みだという所か。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

返事したい！ 返事したいんだけど、この状況がそれを許さない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

山田先生はクラスの余りの冷たさに半泣き気味に。
が、今度は自分の事情で構えなくなった。

自己紹介といえはある意味、高校で一番重要なイベントじゃないか。
ここで躓く訳にはいかないな。

まあ、そういうことなんで後は頑張って下さいと心の中で山田先生に詫びを入れ意識を自己紹介に向ける。

「……………くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

自己紹介は淡々と進み、順番は俺の一つ前に。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自

己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ ダメかな？」

おい、教師が生徒に対してそんな低姿勢で良いのか？

確かに、『男』である俺たちが扱い辛いのは分かるけどさ……

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対ですよ！」

こいつの後ろ姿だけでも、どんな表情をしてるかは大体予想できるな。狼狽えまくってるに違いない。

伊達に物心ついた時から一緒にいる訳じゃないからな。

クラスの真ん中で、しかも最前列なので前の男子が振り返る。

織斑一夏。

俺の幼馴染みで、無二の親友。

爽やかな容貌に高い身長という歩くモテ要素みたいな男で、実際に中学時代はめちゃくちゃモテてた。

ただ、本人が有り得ないほど唐変木なせいで、結局だれとも付き合っちゃいなかったが。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

散々引っ張っというそれだけかよ、という空気に一夏の顔色がどんどん悪くなる。

うわっ、これを今から体験するのか、俺？

イヤだな〜……

とりあえず、一夏はもうちょっと喋らないと座らせてもらえないだろう、今の内に説明しておこう。

どうして、この『女の園』に男が二人もいるのか。
その経緯を……

十十十

「ここに判子を押してください」

「はあ……」

季節は冬、二月の半ば。翌日に受験を控えた俺、葛城桐葉は玄関
先で荷物を受け取っていた。

それがまた奇妙な荷物だった。

何も頼んだ覚えが無いのに何故か俺宛で、更におかしなことに差
出人は不明という怪しさ満載の郵送物なのである。

ただ、不幸なことにも、俺はそういった悪戯を仕掛けてくる相手に
心当たりがあった。

篠ノ之束。
しののへ

俺の兄の同級生にして稀代の天才発明家。

現在とはある事情により国際指名手配されているが、あの手この
手で偽装して、今でも兄には変な物を送りつけてくる。

今回のターゲットは俺、ということだろう。

早速リビングに運び込み、封を開く。

そこには、予想通り束さんからのメッセージカードと、継ぎ目の
無い大きな白い立方体が入っていた。

メッセージカードにはポップな字体で、

『一足遅い、誕生日プレゼントだよ!』

と、あの人にしてはマトモな言葉が綴られていた。

その時点で、俺はこのプレゼントを疑ってかかるべきだったのだ。

「これ、一体何に使うんだよ」

ぼやきながら表面に触れると、微かな駆動音が耳に届いた。

次いで、ガシャガシャツ、と音を立てて立方体が変形。

上の面が消え去り、中の物が露わになった。

「……は？」

間拔けな声を上げる。

そこに鎮座していたのは、黒い鎖。

いや、蛇を模した飾りが付いてる。これは、ネックレスだ。

「また趣味の悪い物を送ってきたな、あの人」

素直に感謝すべきなのだろうが、どうも裏があるように思えてならない。

「ま、一応着けてみるか」

そのネックレスを右手でひょいと持ち上げた瞬間、二度目の変化が起きた。

「なっ……!!」

驚く暇もあらばこそ。

一秒にも満たない刹那の合間に、右手から溢れ出した光の粒子が俺を包み込み――

『登録者の指紋、照合。網膜パターン、照合――待機形態を解除』

流れ込んでくるイメージが脳髓を焼き切らんばかりに暴れ回る。しかし、その感覚すらも既に知っていた。

光が収束した時、世界は変わっていた。

正確には、俺の知覚が変わったのだろうか。

360°、全方位を感覚的に把握できる。

視界はより明るく鮮明になり、身体は驚く程に軽い。

自分の手を見る。

それは、灰色と金色に彩られた厳^{いか}ついアーマーに覆われていた。

自分の足を見る。

同じ彩色が施された分厚い脚部は、地面から数センチ浮いている。

「まさか……でも、これって……」

思考が纏まらない。

これは、この姿は、まるで――

「――ISじゃねえか」

第一話 日常の終着点（前）（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第二話 日常の終着点（後）（前書き）

書き出しにいつも悩む……

第二話 日常の終着点（後）

IS。

正式名称『インフィニット・ストラトス』と呼ばれるそれは、表向きは競技用として扱われているが、強大な兵器としての側面も持つパワードスーツというやつだ。

十年ほど前に開発されたISは、当時の最新鋭の兵器を見戯のようにあしらい、世界にその存在感を見せつけた。

だが、この兵器には致命的な欠陥がある。

ISは、男には扱えないのだ。

その事実も含めて、今の状況を推察してみよう。

肩から腕にかけて灰色を基調に金のラインが入った物々しいアーマーが覆っている。

試しに手を開いたり閉じたりしてみると、鋭い『爪』のついた指はガシャガシャと音を立てて開閉した。

そこら辺は、普通の体と同じ感覚で動くらしい。

足は――何か不思議な感じだ。

浮いているけど、感覚は地に足を付けているときとあまり変わらない。

視覚を背面へと移すと、

「うおっ!？」

そこには、大きな翼が広げられていた。

全てが直線で構成されているのに、どこか神々しさすら感じる機

械の翼。

（何か、だんだん落ち着いてきたぞ……）

思考が麻痺しているのだろう。何にせよ、好都合だ。

「とりあえず、これがどういうものなのかを把握しないと」

改めて、意識を視界ではなく、そこに投影される情報に向ける。
思考しただけで、こいつは応えてくれた。

——ISネーム『くしなだ櫛名田』。登録操縦者、葛城桐葉——。

「!？」

その名には、覚えがあった。

櫛名田と言えば、日本政府の援助を受けて葛城製作所が開発を進めていた第三世代ISの名だ。

しかし、開発担当者の失踪を機に計画は頓挫し、開発途中で得られたデータを元に新しい機体が開発されたハズ。

そして何より、その開発主任は俺の——

「おいっ！ 下で何やってんだ？ さっきから凄い音が鳴っ……」

二階から降りてきた兄は、俺の姿を見るなり絶句して、更には元凶が誰かを思い至って頭を抱えた。

この後、俺は兄に葛城製作所に連れて行かれ、十時間にも及ぶ精密検査を受ける羽目になった。

そして、今後どうするかを親族で話し合っている最中に現れたの

である。

俺以外でISを使える男、織斑一夏が。

＋＋＋

（兄貴の推測が正しければ、ことの元凶は間違いなく束さんだよな……このIS、いつの間にか俺に合わせて『最適化』フィッティングされてたみたいだし）

まったく、周りを振り回すことにに関して、束さんの右に出る者はいないな。

首元を飾る黒いネックレスに手をやりながらぼんやりとそんなことを考える。けど、それも今考えることじゃないかと、自己紹介の方に意識を戻すと、

「以上です」

進退窮まった一夏がそんな惚けた^{とぼ}発言をする。

世界でもたった二人しかない『ISが使える男』に対して、クラスメート全員が期待を抱いていただけに拍子抜けも甚だしい。

ギャグみたいにずっこけてる女子もいるじゃねえか。

というか、お前のが作り出した微妙な空気の中で喋る俺のことも考えてくれ、とこっそり溜め息を吐いていると、

バシンッ！

まるで俺の気持ちを代弁してくれたかのように一夏の頭に天誅が下った。

「いっ——！？」

一夏が頭を押さえて振り返る。

一夏が立っているせいで前が見えない俺は、机から横に身を乗り出して下手人を確認する。

その人は、俺の良く知ってる人だった。

「げえっ、関羽!？」

一夏のバカな発言に、再び天誅が下る。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

織斑千冬^{おりむらちふゆ}。一夏の実姉であり、俺の兄貴の同級生。

身長はすらりと高く、スタイルも抜群。おまけに美人ときたら男が放つとかないものだが、学生時代から誰とも付き合ったことがないらしい。

兄貴とはお似合いだと思っただけだな……

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

先程までの半泣き状態はどこへ行ったのやら、山田先生はにこやかに千冬さんに話しかける。

「ああ、山田君。クラスへの挨拶をおしつけてすまなかったな」

それに応じる千冬さんの顔も見ることがないくらい穏やか。

おお、何か珍しい。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出

来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

キリッとした顔に切り替えての長口上に、黄色い声援が上がる。

「キャ——！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「千冬様！ 抱いて下さい！」

なにコレ。このクラスの女子はみんな百合なの？

そりゃ、男の立場が弱くなってから増えたみたいな話は聞いたことあるし、千冬さんは格好いいから分からないでもないけどさ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

やれやれと肩を竦める千冬さんに対し、女子はむしろ盛り上がり、

「きゃああああっ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡して〜！」

流石に、ここまで来ると引くなあ。

これから一年、このクラスで巧くやれるか不安になってきた。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は――」

額に手を当てて溜め息を吐く千冬さんに、一夏が抗議しようとするが、

バシインッ！

三度目の打撃音。めっちゃくちゃ良い音が鳴るなあ。よく見てみると手に持った出席簿で叩いてるみたいだ。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

そのやりとりで、女子たちが千冬さんと一夏の関係に気づく前に俺を睨みつけ、

「時間も押してる。葛城、自己紹介を済ませろ」

「は、はい」

誤魔化すのに俺を使わないで下さいよ、千冬さん。

立ち上がって、二番目の席なので振り向くかどうかを悩んだ挙げ句、前を向いたまま話すことにした。

振り向いたら多分、めっちゃくちゃ緊張して喋れないと思うし。

「か、葛城桐葉かつらぎ きりはです」

名前だけだと俺も出席簿を食らうことになるな。

それだけは勘弁願いたい。

「動かしたのもつい二ヶ月前なんで右も左も分からない状態ですけど——とりあえず、がむしゃらに突っ走っていききたいと思います」

ヤバい、言ってるで恥ずかしい。

何て青臭いセリフを吐いてるんだ、俺は。

と言っても、もうどうしようもないので最後まで押し通そう。

「えー……一年間、よろしく」

最後まで言い終えた直後に、ちょうどチャイムが鳴ってくれた。
ふう、助かった。

「さあ、SHR《ショートホームルーム》は終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

千冬さんが教師をやってるとは……。大変そうだけど、何となく楽しくなりそうな。

そんな予感がしていた。

第三話 不運な俺と幼馴染み（前書き）

ほとんど原作通りだし、話が進まない……

第三話 不運な俺と幼馴染み

「よ、久しぶりだな一夏」

「久しぶりって……二ヶ月ちょっとだろ？」

休み時間。ようやく一夏に話しかけるタイミングを得た。

ここ、IS学園では最低限の一般科目の授業以外、全てがIS関連の授業となる。

その関係で、今日が新学期の初日だと言うのに一時間からISの基礎理論講座だ。

正直、キツイ。

なので、休み時間中に目いっぱい羽を伸ばしておこうと思い立った訳だ。

「で、受験会場を間違えたっていう間抜けな噂は本当か？」

「そうだよ。偶々（たまたま）入った部屋がIS学園の入試会場だな。テスト用のISを動かしたらこうなっちゃった。そう言うそっちは？」

「俺は受験日の前日に家に送られてきたんだよ。いつの間にか俺が登録されてる、待機形態のISがな」

「おいおい……それって送り主……」

「ああ。多分、束さんだと思う」

束さんの件はかなり厄介な事情が絡んでくるので、少しだけ声のトーンを落とす。

「でもさ、ニュース見たところはすごく驚いたぜ。俺のISをどうするかで親族が揉めてるところにお前がIS動かしたってニュースが流れたんだ」

「俺もだって。一週間後に二人目が見つかったなんて聞いたら、それが桐葉だったんだからな」

「まったくだ。五反田に電話した時なんて……あいつの驚きっぷりと言ったら、ハンパなく面白かったよ」

お互い、物心ついた頃から一緒にいるので、たった二ヶ月の空白ですら長く感じてしまう。

その時間を埋めるように、思い出話に花を咲かせた。

「……………」

その様子を、クラスの女子のみならず、他のクラスや、果ては二、三年の生徒までもが遠巻きに見物している。

これじゃ、まるで動物園の珍獣だ。

居心地が悪くて仕方ない。

ちなみに、IS学園はここ一ヶ所だけしかなく、しかし世界中から生徒を受け入れているためこちらを見つめる女子たちも非常に多国籍だ。

まあ、世界中とは言ってもほとんどが先進国だけど。

「……ちよつといいか」

「「え？」」

女子たちは互いに牽制し合い、誰も話しかけようとはしていなかった。横合いから突然掛けられた声に驚いた。そちらに視線を向けると、

「……ほうき箒？」

「……………」

あー……やっぱりそうか。何となくそうじゃないのかなあ、と思っていた。

篠ノ之しののめ箒。俺と一夏が通っていた剣道場の娘で、俺がここに来ることになった元凶、束さんの妹だ。

うん。よくよく見たら小さい頃の面影が残ってるよな。髪型もポニーテールで変わってないし、昔から可愛いと思ってたけど更に磨きがかかってるし。

彼女は、六年前に引越してからそれきりだったけど、懐かしい再開に胸が熱くなる。

胸といえは……めっちゃくちゃ成長してるな、箒。

「久しぶりだな、ほうき箒。俺のこと、覚えてる？」

「桐葉……か」

「そうそう」

ほっ。忘れられてたらちょっと悲しいしな。

「廊下でいいか？」

箒は俺にも目配せをする。一緒に来いってことか。
どうしたものかと悩んでいると、

「早くしろ」

不機嫌気味に催促の声が掛かった。

「お、おう」

「はいはい」

さて、腹を括るしかないか。
それに、いい加減この居心地の悪さにウンザリしてたところだし、
ちょうど良いだろう。

と思ったのだが、俺たち三人を中心に一定距離を置いて囲むとい
う状態は変わらず。

廊下に出た意味ねえ。

「そういえば」

「何だ？」

自分から廊下に移動したくせに自分から話し出そうとしない箒に
代わり、一夏が口火を切った。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「……………」

箒はサーツと顔を赤らめ、不機嫌そうな表情を作りながらも、態度があからさまに軟化した。

「あー……それって一夏がやたらとハシャいでた時のだろ？ 新聞の切り抜きを俺に見せてさ」

あの時の一夏のテンションは異常だった。

まあ、旧友の活躍を喜ぶというのは理解できないこともないけど。

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

斬新な照れ隠しだな、おい。

しかし、急に黙り込んだ後、俺の顔をチラリと伺って、

「……桐葉^{きりは}。あの人がお前にISを送りつけて来た、というのは本当か？」

「あの人……？ ああ、東さんのこと？ 多分そうだと思うぜ。俺のISに搭載されてたの、未登録の468個目らしいし」

と、サラツと言ってから事の重大さに思い至った。

「じゃあ、桐葉くんのISは篠ノ之博士が組み上げた、て本当なんじゃ……」

「何処の国家にも帰属してないのに専用機持ちなのもやっぱり……」

うげっ!?

俺の噂が急速に広まっていく。

「本当なんだな!! では、あの人は……」

箒が俺の肩をがっしりホールドして、ゆさゆさと前後に揺さぶってくる。

止め、マジで苦し……

俺が意識を手放す寸前に、救いのチャイムが鳴り渡った。
た、助かった……!

「俺たちも戻ろうぜ」

急いで自分たちの教室に駆け込む女子の背中を見送りながら、一夏が声を掛けてくる。

「わ、わかっている」

「りよ、了解……」

箒の予想外のパワーにより、若干涙目の俺が掴まれた肩をさすっている、

バシインッ!

「とっとと席に着け、葛城^{かつらぎ}」

あれ？ 全然助かってないじゃん、俺。

第三話 不運な俺と幼馴染み（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております

第四話 高飛車女と宣戦布告

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

全方位から向けられる視線に耐えつつ何とか二時間を乗り切ったというのにまた、女の子が一夏に絡んできた。

お、可愛いな、とか思ったのは一瞬だけ。

澄み切った碧眼には俺たちを侮るような、男という生き物自体を軽蔑する色がありありと含まれていた。

先の方がくるとロールされた艶やかな金髪が益々『らしい』。確かに、顔立ちはキレイだけど、お近づきにはなりたくないタイプだ。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

一夏も同じ考えみたいだ。少しぶっきらぼうに問い返すと、少女は心底驚いたような顔をする。

「まあ！ なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

恩着せがましい上に何だ、その意味不明な理屈は。

やっぱり、こういう女は苦手だ。

今や、社会の構造は男尊女卑から女尊男卑に変わっている。

その原因は、国家にとって強大な軍事力となるISが女にしか扱えないからで、更に女性を保護するために国が条例やら何やらを作ってしまったから。

その権力を笠に着て、男をパシリのように扱う女までいるのだ。そして、男が反抗でもしようものなら、容赦なく力でねじ伏せられる。

ISという、力で。

「あなたに至っては、お返事すらしないのですわね」

「は、俺!？」

驚きだ。まさか、俺まで話しかけられていたとは。

ガツンと言ってやろうかとも思ったが、これもクラスメートと相互理解を深める良い機会だろう。

「はぁ……すまん。てっきり、話しかけてるのは一夏だけかと思ってな。それと、君が誰か分からないから名前くらい教えてくれると助かる」

流石に、名前を知らないやつにいきなり見下されたらたまらん。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生だいひょうこうほせいにして、入試主席のこのわたくしを!？」

おおっ、細かい所まで説明ありがとう。

「あ、質問いいか？」

一夏が手を挙げる。

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

貴族は良いとして下々って……お前、いつの時代の人間だよ。ていうか、貴族を名乗る割に態度ばかり尊大で礼儀がお粗末な気がするけど。

さて、一夏は何を質問するつもりなのか……。

「代表候補生って、何？」

ガタガタッ！

自己紹介の時みたく、女子の何人かがずっこけた。

一夏……ある意味、お前は天才だよ。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

セシリアが気色ばむ。今にも一夏に掴みかからんばかりの形相だ。

「おう。知らん」

それは堂々と言う事じゃないぞ、一夏よ。

「……………」

セシリアはこめかみを人差し指でトントンと叩いて、必死に怒りを静めながらぶつぶつと呟きだす。

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、今まで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

失礼な。こんな唐変木を日本人の基準にしないでいただきたい。というかこの女、男だけじゃなく日本自体を軽蔑してるのかよ。

「で、代表候補生って？」

仕方ないから、俺が教科書の一節を噛み砕いて解説する。

「国家代表として競技に参加するIS操縦者の候補として選出される生徒のことだよ。これぐらい字面で察しろ」

「そういわれればそうだ」

自分の姉がその代表だったのに、何を惚けたこと言ってるんだ。一回は世界一に成ってるんだぞ、千冬さんは。

「そう！ エリートなのですわ！」

胸に手をやって高らかに宣言する。元気だなあ。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「あんましありがたくもない幸運だな」

「……馬鹿にしていますの？」

当たり前じゃないか、まったく。

セシリアは嘆息すると、一夏の方を睨み付け、

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね」

これは、二時間目のことを言ってるな。

一夏は授業がまったく理解できず、その様子を不審に思った山田先生の質問に「全部からない」と素直に自己申告。

何でも、必読と配られた教材を電話帳と間違えて捨てちゃったとか。

間抜けにも程があるだろ。

「男でISを操縦できるのはあなたたち二人だけと聞いていたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「おいっ、ちょっと待て。俺は理解できてるぞ」

一夏は開き直るが、俺は別に理解できてない訳じゃない。

教材にも目を通したし、元々ISに興味があったので基礎知識ぐらいいは頭に入ってる。

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたたちのような人間にも優しくしてあげますわよ」

やたらと自分の能力を誇示するなあ。

傲慢されても、実際はどれくらい凄いのかが分からないから、イマイチ反応し辛い。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

入試ね……そういえば、ボコボコにやられたっけ。

「入試って、あれか？ ISを動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

それは初耳だ。

「え、マジ？」

「おう。いきなり突っ込んできたからかわしたら、勝手に壁にぶつかってそのまま動かなくなったぞ」

一夏の説明も、セシリアの耳には届かない。

ただ、ひどく冷たい声音で、

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」
と、尋ねた。

「女子ではってオチじゃないのか？」
「ベタなオチだな」

というか、倒したというより教官の自滅だから気にしないでいいんじゃないか？

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

それでも、貴族サマのプライドに障るらしい。

「あなた！ あなたも教官を倒したって言うの！？」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ――」

キンコンカンコン。

三時間目開始のチャイム。助かったな、一夏。

「っ……！ またあとで来ますわ！ 逃げないことね！ よくって！？」

それ、完全に負け犬のセリフだぞ。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目は山田先生が教壇に立っていたのに、この時間はそれまでは脇に控えていた千冬さん……織斑先生が受け持つようだ。

「ああ、その前に再来週^{さいらいしゅう}行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

いきなりの発言に付いていけず、俺と一夏は首を傾げる。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ひそひそと意見を交わすクラスメートたちの声を拾ってみた所、どうやら、このクラス代表者とは名誉な仕事であると同時にとても面倒らしい。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「お、俺!？」

おーっ！ 良し、いいぞ。そのまま一夏に決定しちゃえば……

「わたしはー、葛城くんがいいと思いまーす」

「私も、葛城くんに一票！」

はい、世の中はそんなに甘くないですね。分かてましたとも。

「では候補者は織斑一夏と葛城桐葉……他にいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「ちよっ、ちよっと待った！ 俺はそんなのやらな——」

一夏が立ち上がって抗議する。往生際が悪いぞ。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？ いないなら織斑と葛城の得票数で決定するが」

それなら、圧倒的に一夏が有利だ。

何だかんだ言って、俺よりは社交性はあるし。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

おっ、セシリアまで立ち上がって抗議し始めた。こりゃラッキー。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

前言撤回。まったくラッキーじゃなかった。

男がクラス代表者になることの何処が恥さらしだ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

誰が極東の猿だよ。あー……もうそろそろ、我慢の限界だ。

俺も最初から遠慮なく皮肉を言いまくっている気がするけど。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

（協調性とか、もっと大切な要素が色々あるだろ）

益々、自己陶醉^{じこていすい}に浸り、ヒートアップする演説に心の中でツツコむ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

プチン、と一夏の堪忍袋の緒が切れた音が聞こえた。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

一夏が溜め込んでいた不満を吐き出す。

「なっ……!?!」

おうおう、良い顔だ。反撃されるなんて露ほども考えちゃいなかっただろう？

「あっ、あっ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの!?!」

「はんっ！ 散々日本を侮辱してたやつ^{やつ}のセリフとは思えねえな。つうーか、貴族サマがどんだけ偉いのか知らないけど、一々ふんぞり返るな。ムカつく」

面白そうなので、俺も言い合いに参加。さあ、ここまで来たら出たところ勝負。

こちらら、小学校の最後の方と中学の初めはかなり微妙な扱いを受けてきたんだ。

陰湿なイジメに訴えようが、徹底抗戦してやるぜ。

「決闘ですわ!」

一応、貴族（笑）を名乗るだけのことはあるらしく、正々堂々と勝負を挑んできた。

それは好都合だ。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「わざと負ける理由が何処にあるんだよ？ 俺も一夏も、全力でやるぜ」

「そう？ 何にせよちようどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね!」

よし、適度に盛り上がってきた。

兄貴からも『くしなだ櫛名田』のデータをできるだけ集めてくるよう言われてるし、こっちにとっても良い機会だ。

「ハンデはどのくらいつける?」

「は?」

と、一夏がまた素っ頓狂な発言をする。

「あら、早速お願いかしら?」

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

と、一夏がそこまで言った辺りで女子たちが遠慮なく笑い出す。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

ああ、バカなこと言いやがって。

ここにいる連中は、幼い頃から女の方が偉いって教え込まれて来たんだぞ？

実際、全ての女性が大なり小なりISを使えるのだ。

男と女で戦争したら、男陣営は三日も保たないって言われてるしな。

「……じゃあ、こういうのはどうだ？」

俺が口を開くと、クラスメートの視線が一斉に集中する。

うわっ、何かやだな、これ。拳銃でも突きつけられているような気分だ。

「俺と一夏の二人で組んでお前と戦う」

「はあ!？」

一夏が声を上げるが無視。

セシリアの言い分に問題があったとは言え、こいつがもう少し辛抱してくれてたらこんな手間はかからなかったのだ。

「へえ……あなたはちゃんと身の程をわきまえてらっしゃるのね？
そうでしょうそうでしょう。わたくしの実力なら、あなたたち二人を相手にしてもまだお釣りがきますわ」

怒りの表情はいつの間にか、休み時間と同じ侮辱のそれに変わっ

ていた。

「……ただし、俺も一夏もシールドエネルギーを半分^{イブン}に設定して戦う。お前と俺の実力差を考慮すれば、これぐらいで互角^{イブン}だろ？」

代表候補生相手に、俺が勝負にならないのは分かってるし、ほとんど動かした経験のない一夏は言わずもがなだ。

こっちも負けるつもりなんて毛頭ないから、あくまで俺たちに有利な条件で、尚且つ俺のプライドが許す範囲がこれだ。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、それに葛城はそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

一夏は、まだ何か言いたげだったが、織斑先生に仕切られた以上なにも言えない。

こうして、IS学園での登校初日は、俺が予想していたのとはまた違った波乱によって始まりを告げたのだった。

第四話 高飛車女と宣戦布告（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

第五話 放課後の一幕

「うう……。い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ……。？」

全ての授業が終了した放課後の教室。

俺は、一夏の情けない呻き声を聞きながら、セシリアとの決闘のことを考えていた。

あの後、昼休みに学食に行った時も、一夏は俺が定めた条件に難色を示していた。

まあ、当然だろう。

あちらがふっかけてきた喧嘩とは言え、女一人に男二人でかかるのはどうかと思う。

けど、そんなものは自惚うぬぼれだ。

ISの技量は、経験とほとんど比例する。その点で言えば、俺にも一夏にも勝ち目はない。

この勝負、一応条件の上では対等だし、あちらも二対一に異存はないと言っている。

負けたくないのならばこれが最良の策である。

（いや、考えても仕方ないな。既に喧嘩は買っちゃった訳だし、過ぎたことをうじうじ考えるのも意味はないな）

それに、勝負まで一週間もあるんだ。
色々できることもあるだろう。

よしっ、と切り替えた所で、

「ああ、織斑くん。葛城くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

顔を上げると、入り口に書類を抱えた山田先生が立っていた。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

山田先生はズレた眼鏡を直しながら、俺と一夏に部屋番号の書かれた紙と鍵を手渡してきた。

IS学園は全寮制の学校で、生徒はすべて寮で生活することを義務づけられている。

というのも、IS操縦者が無用なトラブルに巻き込まれないように保護するのが目的だとか。

実際、俺がISを動かしたことで、俺が匿われていた葛城製作所には連日のようにマスコミや研究者が押し掛けてきた。

「俺の部屋、決まってるじゃないじゃなかったですか？ 前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割り無理矢理変更したらしいです。……二人とも、そのあたりのことって政府から聞いてます？」

教室に残っている生徒も若干名いるため、声のトーンが一段落ちる。

「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらくは二人とも相部屋で我慢してください」

「そもそも、個室を用意する必要もないんじゃない？」

男と女が同じ部屋なのは拙いが、俺たちは男同士だ。

何ら問題はないと思うけど。

「えーと……日本政府からの通達なんです。別々にしておいた方が、あちらも都合が良いみたいで……」

うーん、良く分からんが、要するに政府の事情という訳か。

「それで、部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

ここで漸く一夏が口を開く。

ああ、そう言えば荷物。俺も今日から寮に入るなんて聞いてないから、何にも持って来ちゃいねえ。

「あ、いえ、荷物なら――」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

いつの間にか、千冬さんまで教室に戻ってきていた。相変わらず、ビシツとしたスーツが似合って格好いい。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

哀れ、週末までの間、織斑一夏は漫画も読めない日々が続くでしょう。南無。

「なら、俺は帰りますね。荷物を取りに」

まさか、俺の分まで手配されてるなんてこと――

「ふっ、お前の分もちろんと手配してあるぞ」

「何故!?!」

いやいや、おかしいだろ。俺のまで用意されてるとか。

「前もってお前の兄に頼んでおいたからな。確か、お前の分も生活必需品以外は入ってないと思うが?」

クソ兄貴め……

そうだった。俺と一夏が幼馴染みであるように、兄貴と千冬さんも同級生で幼馴染みだったんだ。

「はあ……」

溜め息しか出てこない。

まったく、余計なことをしゃがって。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七

時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、二人とも今のところは使えません」

「え、なんでですか？」

一夏が山田先生に尋ねる。

「アホかお前は。まさか同世代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

でも、一度は憧れるシチュエーションだよな。そういうの。

「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

その、一夏の言葉をどういう風に曲解したのか、山田先生は、

「ええっ？ 女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問題のような……」

と、凄まじくズレた発言をし、クラスの隅や廊下から俺たちの様子を見物していた女子たちは、

「織斑くん、男にしか興味がないのかしら……？」

「それはそれで……いいわね。一夏×桐葉とか!!」

「そうね!!　きっと葛城くんが攻めで、織斑くんが……」

「違うわよ!　葛城くんが受けに決まって……」

それ以上聞くことを、脳が拒否してしまった。

なんとおぞましい会話だ。想像するだけで吐きそうになる。

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、葛城くん。ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

学校案内こそ無かったが、掲示された地図と昼休みに少し歩いたことから、大体の場所は把握している。

確か、五十メートルくらいだったと記憶しているが。

まあ、とにかく――

「とっとうと行こうぜ、一夏」

BL妄想のネタにされるという恐るべき試練から逃れるべく、俺たちはそそくさと教室から抜け出した。

＋＋＋

「ここか……」

俺たちに割り振られたのは1025室。

どうせなら女の子と同室とか、そんな素敵イベントがあってもよ

かったんだが、まあ有り得ないよな。

鍵を差し込んでドアノブを回すと、うおっ！

落ち着いた調度品ばかりだが、中々センスが良い。

寮の部屋なんて、もっと殺風景なものだと思っていたが、高級そうなベッドといい、二人部屋にしても余裕のあるスペースといい、かなり快適に暮らせそうだな。

「なあ、桐葉」

「ん？」

ふかふかのベッドに顔を埋め^{うず}ていると、奥側のベッドに陣取った一夏が話しかけてきた。

「お前、何であの時、俺たちの間に割って入ったんだ？」

「あの時って、あれか。お前がセシリアの喧嘩を買った時の」

「そうだよ」

一夏の声は若干不機嫌だ。

まだ根に持ってるのかよ。以外としつこいな。

「そりゃ、俺もセシリアにムカついてたからだよ。どれだけあいつが努力してきたかなんて知ったこっちゃないが、いきなり猿呼ばわりされりゃ腹も立つってもんだろ」

「でもさ……二人がかりでやることはないんじゃないか？　せめて、順番にやるとかさ……」

あー、もう!!

「一夏！ いい加減くどいぞ!? 昼休みにも話したじゃねえか！」

「それはそうだけどさ……」

一体何なんだ。言いたいことがありゃ、はっきり言えばいいのに。今更、そんなことで遠慮する間柄でもないだろ。

「お前、何か変わった気がするよ」

予想外の言葉だった。

俺は、一夏の言葉に困惑すると同時に、どこか腑に落ちたような感覚を覚える。

「……こんなこと話したらさ、痛いやつだなくみたいに感じるかも知れないけどさ」

「? 何だよ、急に」

俺はそつと、その先の言葉を打ち明けた。

「俺には、殺したい女がいるんだ」

第五話 放課後の一幕（後書き）

桐葉の打ち明け話については、また今度書くことにします。

という訳で、次の話は普通にIS学園での二日目の様子になるかと

……

そろそろ、桐葉の専用機もお目見えです！

ご意見ご感想をお待ちしております。

第六話 非日常への序曲

目まぐるしく過ぎ去った入学初日が嘘だったかのように、その日の朝は穏やかなものだった。

俺と一夏は身嗜みを整えるなり、朝食を摂るべく食堂へ向かう。

「おっ。箒、おはよう」

「ん？ ああ、一夏に桐葉か。お早う」

途中の廊下で箒にばったりと出会った。

朝からシャキツとしてるな。

「とりあえず、一緒に行こうぜ」

「う、うむ」

一夏が声をかけると、顔を紅くしながら承諾。

今日はやけに素直だな。

一年生寮にある食堂まで、特に会話こそ無かったものの、それは居心地の悪い沈黙ではなくて……

（昔っから、こんなだったよな）

俺たちは上の兄姉が同級生だったこともあるし、同じ剣道場に通っていたからこうやって一緒にいることも多かったが、箒はお喋りするようなタイプじゃないし、俺もまあまあ大人しい方だった。

俺たちが黙ってる時は一夏もあまり喋らなかったもので、必然的に

無言での登下校ばかりだったが、俺はその時間をそれなりに愛して
たし、一夏や箒も多分そうだろう。

そんな感慨に耽っている間に食堂に到着。

バイキング形式なので、俺は和食セットを選び、一夏と箒も同じ
ものを選択した。

そのまま、できるだけ端っこのテーブルを目指す。

昨日の経験で、過剰に目立つと余計な心労を負うということはよ
ーく分かったからな。

ま、どこにいたって注目を浴びるのは変わらないから、ただの気
休めだけ。

ちょうど空いている六人掛けのテーブルを見つけ窓側に一夏と箒、
一夏の隣に俺が腰掛ける。

ちなみに俺が取ったのは、白ご飯に納豆、鮭の切り身と味噌汁に
浅漬けまでついたボリューム満点の内容。

ちよつと位置付けは特殊だけど、このIS学園も国立高校だし、
この食事も国民の血税で賄われてる訳だ。皆さんに感謝せねば。

「「いただきます」」

三人とも手を合わせてしつかりと挨拶。

ここら辺の礼儀は三人ともぴっちり教え込まれてる。箒の家は古
式ゆかしい道場だし、一夏の家は姉が厳しいからな。

俺も、二人ほどじゃないが親に礼儀作法一般は叩き込まれてるの
で問題はない。

しばらくの間、食器の微かな音だけが続いた。

一段落ついた所で熱茶を一口すすり、

「流石、IS学園って感じだな。朝からこんな贅沢な物を食べられるとは」

俺の意見に賛同するように一夏は鮭の切り身を摘み、充分に咀嚼してから、

「だな。昨日も思ったけど、メニューもかなり充実してるし」

一夏の言葉にうんうんと頷く。

確かに、食堂のメニューは異常な程に多い。

それもまあ、世界各国から集まった多国籍な生徒のために、様々な国の料理を提供しているからだろう。

厨房では、一体何人の従業員が動き回っていることやら。

「ねえねえ、あの二人がそうなんだよね？」

「窓側の男の子は千冬お姉様の弟らしいわよ」

「手前の男の子は葛城製作所の御曹司なんだって」

噂が広まるのが早いな。マスコミが食いつきそうな餌^{えさ}だけどさ、人のプライバシーを根掘り葉掘り白日の下に晒すのは勘弁願いたい。

「はあ……」

思わず溜め息を漏らした所で、三人組の女子が近付いてきた。

「か、葛城くん。織斑くん。同じ席いいかなっ？」

「ん？」

朝食のトレーを手にした三人は、何故だかガチガチに固まったぎこちない笑顔で尋ねてきた。

確かこの三人、同じクラスだったハズ。

断ってクラスから浮くのもやだし、既に浮き気味の箒を皆と打ち解け合わせる良い機会かもしれない。

横目で一夏に確認をとり、

「俺も一夏も、別に構わないよ」

と応えてやると、彼女たちの強張っていた表情はぱあっと華やいだ。後ろに控えてた二人は小さくガッツポーズまでしている。

「ああゝっ、私も早く声かけておけばよかった……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよ！」

ああ、かなりラフな格好の女子たちが、学年も関係なくわんさか押しかけて来たな。

一夏と二人がかりでも捌くのに苦労したよ。

というか、女子のあの無防備な格好には色々と度肝を抜かれた。

薄手のパーカーの下は下着だけという子もいたしな。

と、女子の知らなくてもいい一面を知ってしまった訳だが、さしあたっての問題はやはり、目の前の女子三人組だろう。

三人組はあらかじめどこに座るのかを決めてたみたいで、迷惑そうに顔を顰める箒を余所にささっと席に着く。

「うわ、二人とも朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

まあ確かに、ボリューム満点の和食セットに加え、ご飯は大盛りだ。量的には結構なものだろう。

「俺は夜少なめにするタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

「俺は部活とバイトで忙しかったから、基本的に朝も夜もめっちゃ食べるよ」

一夏の朝多め夜少なめのスタイルは元々は千冬さんが行っていたものらしく、一夏はそれを真似ただけだとか。
体型と健康維持に効果的らしい。

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

見てみると、確かに少ない。飲み物にパン一枚、少なめのおかずが一皿だけだ。

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

箸が朝からがつつり食ってるもんだから、基準が若干ズレていたが、女子はこれくらいが平均なんだろうな。

「お菓子よく食べるしー」

「ふーん……そんなものか」

相づちを打ちながら、味噌汁を飲み干す。うん、やっぱりうまい。

「……一夏、桐葉。私は先に行くぞ」

「ん？ ああ。また後でな」

食事中もあまり口を開かなかった箸は既に食べ終えたみたいで、仏頂面のまま席を立った。

その後ろ姿を見送った後、速やかに食事を再開する。

「二人ってさ、篠ノ之さんと仲がいいの？」

「昨日も廊下で話してたよね」

「ああ、まあ、幼なじみだし」

「俺も昔なじみだしさ、男が二人しかいないから話し相手は貴重だし」

一夏が曖昧に答え、俺もとりあえず差し障りのない言葉を選ぶ。

実際、彼女たちや（不本意ながら）セシリアのように話しかけてきてくれる子の方が、対応しやすい。

他の女子みたいにじーっと観察され続けるのは、こっちの胃に穴が^あ開きそうだ。

まあ、これを機に彼女たちとだけでも親睦を深めようと俺が口を開きかけると、

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

いつの間に現れたのか、IS学園最強の鬼教官。一年生寮の寮長も務める織斑千冬先生おりむら ちふゆがご光臨なされた。

一周五キロのグラウンドを十周もさせられたら身が保たないので、食事のスピードを少し速める。

そんなこんなで、IS学園の二日目も忙しく始まったのだった。

＋＋＋

「天羽羽斬あめの はばきりの完成はまだまだ先になるか」

ディスプレイに表示された武装のデータを睨みながら、葛城呉羽かつらぎ くれはは苦々しく呟いた。

彼は、世界でもまだ二人しか見つかっていない、男のIS操縦者。その片方、葛城桐葉の実兄である。

「まったく、ウチの櫛名田くしなだを徹底的に弄りまわしやがって。追加装備を作るこっちの身にもなれっての」

自分の弟が搭乗するISであるというだけでなく、自分が常に目標にしてきた女が作った機体である。

満足できるクオリティを目指す内に、すっかり製造は難航してい

た。

こいつに第四世代相当の技術が搭載されていることは、少なからず彼の弟に影響を及ぼしている。

それも、良くない影響を。

桐葉は書類の上では葛城製作所の所属になっているが、実際にはひどく曖昧な立ち位置にいる。

弟に接触しようとする好ましくない輩は、ごまんといえるのだ。

もしかしたら、あの女も――

「チッ……あいつが臨海学校に行くまでに、何とか完成させとかな
いとな」

世界は、確実に動き始めていた。

そう、四年前と同じように……

第七話 幼馴染みと謎の先輩（前書き）

きりが悪かったので、次話の前半部分と結合しました。

第七話 幼馴染と謎の先輩

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ」

「????」

休み時間。織斑先生が一夏に声をかけた。

「せ、専用機！？ 一年の、しかもこの時期に!？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

その内容というものが、クラスの女子の反応を見る限り凄いことらしい。

俺の下に送りつけられたあれもIS専用機らしいけど、あんまり自覚はなかったな。

未だにちんぷんかんぷんな様子の一夏に、織斑先生は一つ溜め息を吐くと、

「教科書六ページ。音読しろ」

と命令した。

教科書をパラパラ捲り、指定のページに辿り着いた一夏が声に出して読み上げる。

「え、えーと……『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』……」

おお、よく噛まずに言い切れたな。

アラスカ条約っていうのは、確かISの軍事利用禁止を規定した世界のIS運用協定だったっけ。

「つまりそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく……」

一夏も大変だな。ただでさえISの知識が乏しいのに、専用機まで与えられるのだ。

俺の実体験から言わせてもらえば、かなり面倒事が増える。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者な

んでしょうか……？」

ぴくっと、箒の眉が動く。

篠ノ之博士——いや、篠ノ之束^{たはね}は箒の姉だ。そのことに、本人は色々と複雑な感情を抱いてるようだが。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

自己紹介の時、一夏と自分の関係を悟られそうになった途端、俺を使って誤魔化したくせに箒の個人情報はあると公開したな。

現在、篠ノ之博士は所在不明で、各国が指名手配中だ。

俺の家に送りつけて来たISには様々な偽装が施されており、俺の指紋や静脈を照合することで開く箱に仕舞われていた。その頭脳をもっと別の所に使うべきだと思う。

「ええええーっ！ す、すごい！ このクラス有名人の身内がふたりもいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？ やっぱ天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？ 今度ISの操縦教えてよっ」

箒の所にたくさんの人が集まるというのは、なかなか見られない光景だ。

一夏みたいに人を中心に立つタイプでもないし、どちらかと言えば俺に近い……クラスで一人だけぽんと浮いているような人間だ。

まあ、何を間違ったのか、俺はとても目立ってしまっているが。

「あの人は関係ない！」

突然。大きな声が、教室に響いた。

箒の周りの女子たちは啞然とした表情で固まり、クラスの空気自体が一瞬だけ凍り付いた。

周囲の様子に気付いてか、はっとした箒は窓の方に顔を背け、

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

と、先ほどの大声とは対照的な低い声で続けた。

あの人。箒が束さんに対してそんな呼び方をしたことに、俺は引っかけを覚えた。

「なあ、一夏。束さんと箒ってさ……そんなに仲良くなかったよな？」

「うーん……確かに、一緒にいたところを見たことない気がする」

机から身を乗り出して一夏に尋ねてみると、予想通りの答えが返ってきた。

そこまで頻繁に会っていた訳じゃないが、箒と束さんの間には何かしらのわだかまりが存在した。

「さて、授業をはじめろぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

織斑先生が微妙な空気を振り払い、授業が始まる。

しかし、箒について考えを巡らせていた俺は、その授業中すっかり上の空だった。

＋＋＋

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

「随分と余裕だな。これで三人とも専用機での勝負だ。お前にしたら、かなり分が悪いと思うぜ？」

昼休みに入り、喧嘩を売りに来たセシリアに軽口を叩く。

「関係ありませんわ。あなたがたが専用機に乗ったところで、わたくしとの差は微塵も埋まりませんもの」

「その余裕が何時まで続くか……見物みものだな」

挑発に挑発を返す。かなり不毛な会話だが、言われっぱなしは性に合わない。

「き、桐葉……。話に付いていけないんだが」

「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思ったただけだけど。どうすげーのかはわからないが」

「それを一般的に馬鹿にしていると言うでしょう!？」

このやり取り、昨日^{きのう}見たばかりだぞ。

「……こほん。さっき授業でも言っていたでしょう。世界でISは467機。『468だぞ』つまり……えっ？」

一夏にご高説をたれていた途中で、俺が口を挟む。

その意味を理解したセシリアは、驚いた顔で俺の方を振り向いた。

「468……あなたのISに使われているのが、その468個目でしたわね……」

「そうだよ。だから、今度の勝負は各国の研究機関がこぞって見に来るらしい。ISを使える男ってだけでも十分な研究対象だしな」

まったくもって気の滅入る話だ。これで益々、俺たちは負けられなくなってしまった。

コアのことを話題に出したため、セシリアの興味は窓際の席——
簾へと移った。

「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」

どういう意図で話しかけたかは分からないが、先程の一件からも

推察できるようにかなり不機嫌な顔になり、

「妹というだけだ」

素っ気ない言葉に剣呑な雰囲気^{マシ}を漂わせるから、セシリアが本気で引いてる。

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

いえ、クラス代表なら何時でも譲ります。

俺たちが気に入らないのは、あなたの態度の方です。

それっぽい捨てぜりふを吐いてそのまま立ち去っていく背中に、俺は心の中で呟いた。

「箒、飯食いに行こうぜ」

「……………」

ともすれば、一人きりで食事をしかねない様子の箒を、一夏が昼食に誘う。

一夏のこういうところ、とてもじゃないが俺には真似できない。こうやって他人を思いやることができるのは、一夏の最大の美点だ。

無言を貫き通す箒に、俺と一夏は顔を見合わせ、

「一緒に飯食いに行かない？」

今朝ご一緒した三人組に声をかける。
まあ、他の子よりも幾分か誘い易いからな。

「はいはいはいっ！」

「行くよー。ちょっと待ってー」

「お弁当作ってきてるけど行きます！」

三人ともあっさり承諾。幸先が良いな。

「……私は、いい」

「まあそう言うな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おいつ。私は行かないと――う、腕を組むなっ！」

多少強引だが、俺と一夏で両側から引っ張る。

「なんだよ歩きたくないのか？ おんぶしてやろうか？」

「なっ……！」

こういう無神経なセリフが玉に瑕きずか。強引に女子と腕を組んでる時点で、俺に言う資格はないけど。

「は、離せっ！」

「学食についたらな」

「い、今離せ！」

「離したら逃げるだろ、お前」

「当たり前だ！ ええいっ——」

気付いたときには天井を見上げていた。

ほとんど反射的に受け身をとったが、場所は堅い床の上。熱を伴った痛みが背中中に入った。

「痛い……」

「腕あげたなあ」

「ふ、ふん。お前たちが弱くなったのではないか？ こんなものは剣術のおまけだ」

いやいや。あんなきれいな片手投げを「おまけ」とは言わないよ。

「え、えーと……」

「私たちやっぱり……」

「え、遠慮しておくね……」

声をかけた女の子たちが教室の隅に逃げ帰る。

そりゃ、いきなり投げ技なんて見せられたら普通は引くよな。

「箒」

「な、何だ」

「飯食いに行くぞ」

そう言うと、一夏は学食へ向かっていってしまった。

未だ困惑の表情の箒の背中をポンと押して、俺も一夏の後を追いかけた。

後ろをちらりと確認すると、箒はちゃんと付いてきている。

最初から素直に付いてくれば良いのに。

学食はかなり混雑していたが、ギリギリ三人分のスペースは確保できそうだった。

「桐葉も箒も、日替わりでいいだろう？ 今日には鯖の塩焼き定食だつてさ」

「構わないぞ」

「ちょ、ちょっと待て一夏！ 話を聞け！」

「何をだよ。というか、お前。クラスで友達ができなかったらどうするつもりだ？ 高校生活暗いとおまんないだろう」

「わ、私は別に……頼んだ覚えはない！」

あー、もう。つままない意地を張りやがって。

「俺も頼まれた覚えがねえよ。あ、おばちゃん、日替わり三つで食券ここでもいいんですよね？」

一夏は食券をカウンターに置き、箒の方に向き直る。

「いいか？ 頼まれたからって俺はこんなこと、普通はしないぞ？ 箒だからしてるんだぞ」

「な、なんだそれは……」

「なんだもなにもあるか。おばさんたちには世話になったし、幼なじみで同門なんだ。これくらいのお節介はやらせろ」

「そうだぜ、箒。俺だって色々と良くしてもらったからな。いつでもお前の力になってやる」

「……」

箒は、なにやら真っ赤な顔で視線を逸らす。
そのまま、消え入るような細かい声で、

「そ、その……ありが——」

「はい、日替わり三つお待ち」

「ありがとう、おばちゃん。おお、うまそうだ」

「うまそうじゃないよ、うまいんだよ」

——ありがとう、と言い切る前に一夏が学食のおばちゃんと談笑

を始めてしまい、うやむやになった。

「箒、テーブルどっか空いてないか？」

「……………」

「箒？」

はあ…………一夏のせいで、またへそを曲げちゃった。

「…………向こうが空いている」

そう眩くなり、自分の分の日替わり定食を持って一人でずんずんと進んでいってしまう。

先が思いやられるよ、まったく。

「そーいやさあ」

「…………なんだ」

テーブルに付いて少ししてから、一夏が用件を切り出した。

「ISのこと教えてくれないか？ このままじゃ来週の勝負で何も出来ずに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

いやいや、あれは中々聞くに耐えないものでしたよ。

「それをなんとか、頼むっ」

一夏が箒を拝み倒す。何とも情けない図だな。

「……………」

箒は完全無視。見るに見かねたので助け舟を出してやる。

「俺でいいなら教えるぜ？　ま、俺もISの稼働時間は五時間にも満たないけど」

「ほんとか！？　マジで助かる！」

「ちょっと——君は私との先約があるでしょう？」

唐突に、女子の声が割り込んだ。黄色のリボンから推察するに、二年生みたいだ。

癖のないセミロングの髪に、すっと通った鼻梁^{びりょう}。一つ学年が違うだけなのに、落ち着いた印象を受ける。

「は？　えっと……どちら様で？」

テンパって、声が裏返った。初対面のハズなのに、先約とはどういうことだろうか。

「あれ？　あなたのお兄さんから話を聞いてない？」

兄貴から……？　食事中に行儀が悪いとは思いつつ、携帯でメールを確認すると——

(げっ！ メール来てたのかよ)

気づかない内にメールを受け取っていたらしい。

内容は、『俺の方でお前のコーチを用意しといたから、面倒見てもらえ』……どっちにしても、詳しいことは何も書いてなかった。

「それじゃあ、兄貴が用意したコーチっていうのが……」

「そ、私のこと」

彼女はにこやかに微笑んで、すっと右手を差し出す。

「七瀬瑞癸ななせ みずきよ。よろしくね」

「葛城桐葉かつらぎ きりはです」

こちらも右手を出して握手する。そういえば、女子と握手するなんて初めてかも。

さっきの時間に箸と腕は組んだけどな。

「そっちの二人は？」

瑞癸先輩みずきがすっかり置いてけぼりを食らっていた二人に視線を向ける。

「お、俺は織斑一夏です」

「……篠ノ之箒しののへです」

「一夏くんに箒さんね……良し、覚えた」

その後、また俺の方を向いて、

「じゃ、アリーナの使用申請を出したから、放課後、第三アリーナで待ってるわ。放課後、大丈夫よね？」

「え、あー……たぶん」

特にやることもなかったはず。

その時間をISの訓練に使えるなら願ったり叶ったりだ。

「ついでに一夏くんもどう？ ISが無くても、見学するだけで得られるものもあるからさ」

「えっ！？ お、俺は——」

「一夏には、私が教えます」

先輩の提案を箒が遮る。

「そうなの？ それじゃ、桐葉くんだけね」

「よ、よろしくお願いします」

「そんな固くならなくていいのに。じゃあ、放課後、第三アリーナだからね」

何度も念を押すように告げ、そのまま瑞癸先輩は立ち去っていった。

何にせよ、これで放課後の予定は埋まった訳だ。

第七話 幼馴染みと謎の先輩（後書き）

瑞癸先輩は、一応ヒロインの一人です。

ご意見、ご感想をお待ちしています。

第八話 放課後の特別訓練（前書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ありません。
という訳で、第八話です。

第八話 放課後の特別訓練

「はあああっ！！」

裂帛の気合いをかけ声に込め、俺は手にした直刀を真っ直ぐに振り下ろす。

「甘い！」

七瀬先輩はその一撃を苦もなく打ち払うと、返す刀で横風の一閃を浴びせてきた。

咄嗟に避けた俺の右腕の装甲を、実体剣の鋭利な刃が浅く削り取る。

冷や汗がツーツと頬を伝った。

「まだまだあ！！」

続けて七瀬先輩は突進してくる。袈裟切りにしようと刃が振り下ろされるが、それは大きく後ろに距離を取ってかわした。

十メートルほど離れて、二人が相對する。

第三アリーナでは、俺と七瀬先輩によるISでの模擬戦が行われていた。

しかも、ほとんど実戦形式の模擬戦である。

訓練をつけてくれるのはありがたいが、これはハード過ぎると言わざるを得ない。

俺は、既に『櫛名田^{くしなだ}』という専用ISを持ってはいるものの、操縦時間が十時間にも満たない新兵だ^{ルーキー}。

対して、七瀬先輩は経験豊富な二年生。いくら使っているISが量産機の『打鉄』^{うちがね}とはいえ、実力差は歴然である。

「間合いの取り方が悪いのよ。生身とは違うってことをちゃんと意識しないと」

「攻撃が単調すぎて軌道が読み易いのよね。強弱をつけて」

「こっちの動きを見てから動いたんじゃ遅いわよ」

などなど、先輩は的確なアドバイスをくれるんだが、如何せん応える余裕もない。

けど何度も実体剣で打ち合ってる内に、段々と感覚を掴んできた。

近接戦闘用ブレード『天叢雲』^{あめのむらくも}を握った手に、ぐっと力が入る。ここで一つ、勝負に出てみよう。

「これなら……どうだ!!」

俺のIS、『櫛名田』は背部、脚部に大型のスラスタを持つ。それによる高い機動力を生かし、一旦距離を取った後に勢いをつけて反転。

そのスピードをすべて乗せるように、渾身の突きを放つ。

だが――

「やり方は稚拙だけど、まあまあ良かったかな」

七瀬先輩は、俺の一撃を備え付けの物理シールドの曲面を用いて完全に往^いなした。

なんて技術だ……

しかし、俺に相手の技術を感じしている暇なんてない。

ほぼ捨て身の一撃を回避されたために大きく体勢を崩した俺は、

「ふっ——！」

そのがら空きの背中に、刀の鈍い一撃を食らってノックアウト。
しかも、峰打ちだった。

初めての放課後訓練は、俺の身も心もズタズタにして終了した。
はぁ……情けない。

＋＋＋

地面に降り立ち、ISを展開を解除した途端、言いようのない虚
脱感が押し寄せてきた。

今までは気にならなかったが、下に着ていたボディースーツも、
肩まで伸ばした髪の毛も、じつとりと汗ばんだ上に肌に張り付いて
きて気持ち悪い。

見ると、七瀬先輩はうっすらと汗をかいてはいるが、俺よりずっ
と平気な様子だ。

むしろ、汗に濡れた黒髪が妙に艶めかしいというか何というか……

「ちょっと、桐葉くん。あんまりジロジロ見られると恥ずかしいん
だけど」

「へ？ あ、ああ！ すみません」

IS展開時に下に着ておくボディースーツをISスーツと呼ぶの

だが、女子用のはかなり露出が高い。

要するに、水着みたいな感じなのだ。

正直、目のやり場に困る。

ちなみに、男子用のは腕も首もすっぽり覆われたタイプで、露出は極端に少ない。

まあ、男の露出が多くて誰が喜ぶんだって話だけど。

「さ、流石は日本の代表候補生って感じですね」

気恥ずかしさを紛らわすべく、必死に話題を探す。

「専用機はないけどね」

「えーと、確か五人でしたっけ？ この学園にいる専用機持ちの数」

確か三年生に一人、二年生に二人、一年生は俺も含めて二人で計五人だったよな。

「一夏くんを数え忘れてるよ。それも合わせたら、専用機持ちは六人だね」

「あっ……そういえば」

一夏のはまだ用意されてないから、すっかり忘れてた。

「代表候補生でもないし、どっかの企業のテストパイロットでもない一夏くんが専用機を貰うと、各国は争奪に必死でしゅうね」

俺は葛城製作所に属しているから良いけど、無所属の一夏はどの

国も喉から手が出るほど欲しい研究サンプルだろう。

俺が書類上だけでも葛城に所属し、一時の平穩を得られているのは間違いなく兄貴のおかげだ。

一夏が現れるまでは俺がISを使えることを必死に隠し通し、その間に色々と根回しをしてくれてたみたいだな。

兄貴と言えば、七瀬先輩と兄貴はどのような関係なのだろうか。

「兄貴がコーチを頼んだってことは、前から知り合いだったんですよね。どこで知り合ったんですか？」

その疑問を投げかけてみる。

「専用機は持ってないけど、IS関連企業から新武装のデータ収集に付き合って欲しいって依頼は多いのよね。呉羽さんとは、葛城製作所に依頼された時に知り合ったの」

「武装データの収集、ですか」

「他人事じゃないでしょ。企業に所属している以上、いずれは経験するわ」

いずれは俺にも、そうやって企業からの依頼が入るのだろうか。あまり実感が湧かない。

「ま、今は目先の試合に集中しましょう。二対一でやるんだから、負けたらカッコ悪いでしょ？」

はい、その通りです。

俺はそれから一週間。放課後の時間を七瀬先輩に徹底的に鍛えてもらうこととなった。

第八話 放課後の特別訓練（後書き）

最初は瑞癸との戦闘シーンをたっぷり書くつもりが、テンポの良い戦闘描写ができずにバツサリカット。

次こそは、頑張るぞ！

次回はいよいよセシリア戦です。

第九話 決戦前の少年たち（前書き）

結局セシリア戦開始まで行けなかった……

第九話 決戦前の少年たち

その日の朝を、俺は晴れやかな気分で迎えた。

「ん~~~~!」

ふかふかなベッドの上で大きく伸びをして、隣のベッドに眠るルームメイトに声をかける。

「おはよう、一夏」

「……お、おはよう」

ゆっくりと体を持ち上げた一夏の表情は、俺とは対照的に沈鬱ちんうつなものであった。

さながら死人のような顔で、一夏が口を開く。

「確認するけどさ、今日って月曜日だよな」

「当たり前だろ？ 日曜日の次は月曜日だ」

「そうか、そうだよな……はあ」

一夏はがっくりと肩を落として溜め息を吐く。
一体どうしたというのだ。

「今日はセシリアと決闘だぜ？ 始まる前からそんなテンションで
どうする。まったく、お前らしくもない」

「桐葉はやけに自信ありげだな。そんなにあの先輩との訓練は良かったのか？」

「おうっ！ 土日の訓練のキツさは半端なかったが、おかげで感覚はほとんど掴めた。技術では及ばなくても、何とかやり合うくらいはできるぜ！」

瑞癸先輩—（名前で呼んでと言われた）はスパルタだったけど、アドバイスは的確だし人に教えるのも慣れている様子で、とても分かりやすかった。

訓練が厳しかった分、得る物も多い。

「良いなあ……俺も先輩に教えて貰いたかったよ」

こいつは箒にISのことを教えて貰っていたハズだが、よっぽど教え方が悪かったのか？ それ以前に――

「お前は止めとけ」

「何でだよ」

「箒が拗^すねる」

ちよっと考えたら分かるだろうに。

箒がお前のコーチを買って出たの、見ず知らずの女の子に一夏を取られるのが嫌だったからだろ。

箒は、昔っから一夏にぞっこんだからな。

同年代の女子として、箒に特別な感情を抱いたことだってあったけど、今は親友としてつるめていればそれで十分だ。

どちらかと言えば、箒の恋を応援してるぐらいだし。

「何で箒が拗ねるんだ？」

「何でって……やっぱり、とんでもなく鈍いな」

「……？ 箒はただの幼なじみだろ」

「幼なじみって単語で無意識に距離を取ってるんだとしたら、俺はお前を尊敬するよ」

自分に寄せられている好意に気付きさえすれば、彼女の一人や二人、簡単に作れるくせに……勿体ない。

「周りの気持ちに、気付いてやれよ。でなきゃ、一生後悔するぜ？」

「周りの、気持ち……」

俺は、二回も後悔したからな。

一回目は両親で、二回目は……っていかんいかん！ 決闘前に俺までセンチになってどうする。

とにかく、一夏にはそんな目に遭ってほしくないからな。

「ま、とりあえず飯食いに行こっか。今日はがつり食って英気を養わないと」

期せずして重たくなった空気を紛らわすように、俺は一夏を朝食に誘うのだった。

結局、俺が事の真相を知るのは放課後のことになる。

＋＋＋

「――なあ、一夏。箒」

「なんだ、桐葉」

叫び出したい衝動を必死に抑えながら、震えた声で尋ねる。

「お前ら、剣道の稽古しかしてないと言うのは本当か？」

「……………」

「目をそらすな！」

朝食の時も、休み時間も、代わる代わる女の子がやってきては試合を頑張ってと声をかけてくれた。

その言葉に込められた期待と比例してプレッシャーも段々蓄積していたが、今問題にすべきはそれではない。

本当にゆっくり話す暇がなくなるほど声をかけられるので、三人で集まったのは放課後になってからだっただが――

「そうだぞ、箒。ISのことを教えてくれる話はどうだったんだ？」

「し、仕方ないだろう。お前のISもなかったのだから」

「まあ、そうだけど――じゃない！ 知識とか基本的なこととか、あっただろ！」

そこで、箒が一夏に何も教えていないという衝撃的な事実が判明した。

あんだだけ自信満々に瑞癸先輩の申し出を蹴っというて何やってたんだ。

「二人で言い争ってる場合か!!」

確かに、一夏のI Sはまだ来てないけど、出来ることも有ったはずだ。

まったく。もう時間が無いってのに。

「はぁ……。作戦だけでも説明するからよく聞け。まず――」

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ!」

俺が説明を始めようとしたら、慌てた様子で第三アリーナ・Aピットに駆け込んで来た山田先生に妨害された。

チッ……タイミングの悪い。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す〜は〜、す〜は〜」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

一夏は冗談のつもりだったんだろうが、山田先生が本当に呼吸を止めた。

落ち着かせようとしていたのに、いつの間にかコントに変わって

る。

「……………」

「……ぶはあっ！ ま、まだですかあ？」

真っ赤な顔に潤んだ瞳で一夏を見上げる山田先生。
教師に何させてんだ、こら。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

毎度おなじみ。一夏の背後に立った千冬さんが、出席簿で天誅を下した。

「やーい。ざまーみぶっ!？」

「貴様も馬鹿なことをやってないで準備をしろ」

バシインツ！

薄い出席簿にどういう力を加えたら、こんな鈍い一撃になるんだ？
というか、完全にとぼっちじゃねえか。

「準備も何も、設定はちゃんといじってますよ」

「ならいい。とつととISを展開しろ」

弟とその親友が決闘に向かうんだから、もう少し優しい言葉をかけてくれてもバチは当たらないでしょ。

優しい千冬さんというのは中々に想像しがたいけど。

バシインッ!

「いい加減学習しろ。さもなくば死ね」

人の考えを読んで攻撃するのはおかしいでしょ。そんなんだから彼氏が出来ない……

「ふん。馬鹿な弟とその友人にかける手間暇がなくなれば、見合いでも結婚でもすぐにできるさ」

同じことを考えてたらしい一夏と俺に、痛烈な皮肉を浴びせる。こればかりはその通りなので言い返せない。本当に世話になってるからな、織斑姉弟には。

「そ、そ、それっですなっ! 来ました! 織斑くんの専用IS!」

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番のものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

「頼りにしてるぜ、一夏。初戦でサクッと勝利を収めれば、箔もつくだろうしな」

困惑顔の一夏に、それぞれが声をかける。

「え? え? なん……」

「」「早く!」「」

四人の声がきれいにハモる。

時間が無いって言われてるのに、まどろっこしいな。

腹の底に響くような重低音に、ピット搬入口を見やる。

防護壁が斜めに開くと――そこに、『白』が、いた。

曇りのない純白と、所々を青で彩られた鋼鉄の鎧。

その装甲は、自らの主を迎え入れるように開かれている。

「これが……」

「はい！ 織斑くんの専用IS『びやへしぎ白式』です！」

ただただ、その圧倒的な存在感に目を奪われた。

自分のではないISをこうもじっくり観察するのは初めてかもしれない。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフイッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

千冬さんの声でようやく我に返る。見れば、一夏がゆっくりと白式に触れようとしていた。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

千冬さんの指示に従い、一夏が白式に身を任せる。それに合わせて、装甲が変化を始めた。自動的に一夏の体に纏わ

れていく。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いてるな。一夏、気分は悪くないか？」

いつもは注意するくせに、千冬さんが一夏を名前で呼んでいた。よっぽど心配してるんだろうな。まあ、たった一人の家族だから当然か。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

短いやり取りの後、今度は箒の方にほんの少しだけ顔を向けて、

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

こんなの見せられると、見送ってくれる人のいない俺だけなんか寂しいな。

「桐葉……お前の兄から伝言を預かっている」

「え？」

千冬さんが思いがけない言葉をかけてきた。

「『何が何でも勝て。負けたら半殺し』だそうだ」

その一言で心がぽおっと暖くなり、るいせん涙腺が緩んだ。出撃前に泣かす気か。

肩に入っていた力は、いつの間にか抜けている。

「くしなだ櫛名田」

俺の呟きに呼応して、ISが展開する。
スマートな腕部、対照的に肥大化した脚部。背中に広がった鋼の翼。

全てが灰色と金色にカラーリングされて、どこことなく武者鎧を模したような意匠。

「手早く済ませて帰ろうぜ」

「ああ」

俺たちも、それだけのやり取りで事足りた。

意識をこの前の『敵』に向けて研ぎ澄ましながら、俺たちは大空へと飛び出していった。

第九話 決戦前の少年たち（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております

第十話 クラス代表決定戦（前）（前書き）

今回はかなりの難産だった……

第十話 クラス代表決定戦(前)

俺を乗せたカタパルトがレールの上を速^{すみ}やかに走り抜け、勢い良く空中に放り出した。

タイミングを合わせてスラスターを解放し、戦闘待機状態で滞空する。

少し遅れて、『白式』を纏った一夏も出てきた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

眩しさに目を細めていると先にアリーナに入っていたセシリアが、いつもの腰に手を当てたポーズで迎えてくれた。

その体を包むのは鮮やかな青色をしたIS。

腰部でスカートのように大きく広がった装甲と、両肩に二機ずつ連なったフィン状のパーツが特徴的な機体である。

すぐさま、ハイパーセンサーから読み取った視覚情報を基に、敵機のおおまかなデータが弾き出された。

——戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り——。

列举された敵の特性に、思わず舌打ちする。

近接格闘が主体の俺にとっては最悪な相性だ。

セシリアは手にした長大に過ぎる銃器——検索、六七口径特殊レーザーライフル《スターライトmk?》と一致——をひけらかしな

がら、

「最後のチャンスをあげますわ」

と、意味不明なことをのたまった。

相変わらずの鼻につく言い方に、眉を寄せながら一夏が尋ねる。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

どっちだよ。というか、許されなければならないことをした覚えがない。

——警戒、敵I S操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティIのロック解除を確認。

言い返そうとする一夏を右手で制止し、少し前に出る。

「謝る？ それはそっちだろ、セシリア・オルコット。お前はこれから、俺たちにボコボコにされるんだからな」

「言ってくれますわね。極東の猿は群れると気が大きくなるのですか？」

「はんっ！ 今さら二対一なんて卑怯ですってか？ 条件は対等な^{イーブン}んだし、ハンデを付けると言ったのは自分だろ」

IS戦を前に、醜い舌戦が始まってしまった。
はつきり言って、不毛である。

しかし、一度ヒートアップしてしまうと、中々歯止めが利かない。
俺が追撃しようと口を開きかけた瞬間、

(……ッ!?)

ピットの方から身体の芯まで凍り付くような殺気が放たれた。間
違いなく、千冬さんである。

これは、早く始めないと拙いな。

「こほん。それでは――」

――警告! 敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー
ギ―装填。

「お別れですわね!」

警告文を認識すると同時に回避行動を取る。
機体色と同じ、青色の熱線が俺の体ギリギリの所を走り抜けた。

「うおっ!?!」

続けざまに放たれたレーザーが一夏の左肩を捉える。
今の、タイムラグがほとんどなかったぞ!?

白式の装甲が爆音を上げながら弾け飛び、一夏は左半身を後ろに
引っ張られたような体勢になった。

「口先だけじゃないってことか」

分かっていたことだが、流石は代表候補生。みずき瑞癸先輩には及ばないにしても、実力は折り紙付きということだ。

——バリアー貫通、ダメージ46。シールドエネルギー残量、29。実体ダメージ、レベル低。

共有している一夏の機体状況が流れ込んできた。単純計算で、あと六発食らえばアウトである。

IS戦で勝敗を判定するのは、シールドエネルギーと呼ばれるものの数値である。

このシールドエネルギーは、アールビージRPGで例えるならHP。ヒットポイント相手のシールドエネルギーを0にするのが勝利の条件である。

それとは別に、今の一夏のようにシールドを貫通されると装甲自体にダメージが与えられ、破損箇所によっては後の戦闘行為に支障を来たす場合もある。

また、装甲の展開されていない箇所にシールドを貫通するような攻撃が加えられた時、ISは操縦者の命を守るため『絶対防御』を発動する。

これは全てのISに搭載されている機能で、あらゆる攻撃を受け止めるが、シールドエネルギーを極端に消耗してしまう。

肩には装甲が展開していたので、先ほどは使用されなかったようだ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・

ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

高空からこちらを睥睨するセシリアがわざとらしく口上を述べる。

それを皮切りに、青い閃光の雨が絶え間なく降り注いだ。

その合間を縫うように白い騎士と灰色の武者が舞い踊る。

本来なら、スクリーンの向こう側で展開されるべき一幕。

しかし、頬を掠める熱線が、巻き上げられた砂塵が、これが現実という何よりの証明である。

（ああ……踊ってやる）

心の中で呟き、意識を集中させて武装を呼び出す。

右手から光の粒子が溢れ出し、黒色の両刃刀の形を成す。

《天叢雲^{あめのむらくも}》。刀身に膜状にエネルギーを展開することにより高い切断能力を有する実体剣。

武者鎧にも似た、俺の専用IS『櫛名田^{くしなだ}』にはそぐわない、古めかしい直刀である。

反対に、左手で収束した光は漆黒の銃を形をとる。

《大蛇^{おろち}》。拳銃^{ハンドガン}を一回り大きくしたような小振りのビームライフルだ。

ちらりと後ろを確認すると、一夏のIS『白式^{びやくしき}』も刀型近接ブレードを展開していた。というか、それ以外にないようだ。

まあ、何にせよ作戦は一つに絞られた。

「一夏！ 援護するから突っ込め！」

「おう！」

左手の《大蛇》を連射しながら、円を描くように距離を詰める。
紅い光条が幾つも放たれ、セシリアを掠めた。

射程や威力では敵わないが、取り回しやすさはこちらが上だ。

「くっ……あなたもBT兵器を！？」

「BT兵器……？ たぶん、それとは別のタイプだと思うぜ」

彼女のライフルがそのBT兵器というやつなら、恐らくは違う。
束さんが作った武器だから、どうせまったく新しい技術とかが放
り込まれているのだろう。

「おおおっ！」

俺に気を取られてる隙に、一夏が実体ブレードで切りかかる。
セシリアがそれをかわせば、俺が砲火を浴びせて反撃の機会を潰
す。

男が二人がかりで女の子を虐める図だが、致し方ない。

「決めさせてもらうぜ！」

クラス代表を決める戦いは、早くも熾烈を極めていた。

第十話 クラス代表決定戦（前）（後書き）

いきなりですが、ここで今後のセシリアについてアンケートをとりたいと思います。

- 1 桐葉とフラグ（恋愛）を立てる
- 2 原作通り一夏のハーレムに加える
- 3 二人と友情フラグを立てる

話の大筋は決まっていますが、彼女をどうするかだけは未定でして……

感想に番号を書いてください。

その他、ご意見、ご感想をお待ちしております。

第十一話 クラス代表決定戦（後）（前書き）

1
1／2
3 大幅加筆修正

第十一話 クラス代表決定戦（後）

「ハア……ハア……」

おかしい。どうして、こうなった。

俺たちは、つい先程まで^お圧していたハズじゃなかったか。

それが、どうして――

「ISを初めて間もないとは思えない反応ですわね。褒めて差し上げますわ」

「お褒めに与り、光栄だよ……」

優位に立ったからこそその余裕か、セシリアはそんな言葉まで投げかけてきた。

こちらにはそんな余裕もないので、適当に返す。

実際、俺たちの現状はかなり悲惨だ。

シールドエネルギーの残量98。実体ダメージレベル低。スラスタ―系統は無事だが、両肩のアーマを弾き飛ばされて上半身はほとんど丸裸だ。

一夏に至ってはシールドエネルギー残量67。実体ダメージ中破。あと一撃でも食らえばお陀仏である。

対して、セシリアのISには破損箇所が少なく、シールドエネルギーも300近く残している。

いくら二人がかりでやる条件として、始めからシールドエネルギーを半分に設定していたと言っても、この差はあんまりだろう。

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたたちが初めてですわね」

そう。セシリアの周りに浮かぶそれが、俺たちの優勢を一瞬にして断ち切った。

彼女の肩から分離した四機の自立機動兵器。特殊装備『ブルー・ティアーズ』。

彼女のISの名前は、この武器を搭載した実戦投入一号機であることに由来するらしい。

というようなあれこれを、俺たちが必死こいてレーザーの雨を避けてる間に教えてくれた。ご高説どうも。

「では、^{フィナーレ}閉幕と参りましょう」

セシリアの命令一下、四機のブルー・ティアーズ——仮にビットと呼称しよう——が縦横無尽に空を駆ける。

二機は俺に、残りは一夏に差し向けられ、先端部についた砲口から特殊（BT）レーザーを浴びせてくる。

無論、やられっぱなしなど性に合わないので左手の《大蛇》^{おろち}で迎撃するが、的が小さいため思ったように戦果は挙げられず、紅い閃光は虚しく空を切るばかりだ。

「一夏！ もうへばったなんて言わないよな？」

「舐めんな！ 突っ込むから援護しろ」

折れそうになる心を鼓舞すべく、大声を張り上げる。
今さら通信機能を使おうが使うまいが戦況は変わらない。

「バカの一つ覚えですわね」

完全に見下しきった表情でセシリアが呟くと同時に、

「ッ……!!」

目の前を横切る警告文。
アラート

反射的に動いたことが、俺の命運を分けた。

狙いすました一撃が背部ウイングスラスターの先端を掠める。

いつの間にか、一夏の方行ってたハズの一機がこちらに狙いを定めていたのだ。

「ぜああああっ!!!」

憎々しげに舌打ちするセシリアに、薄くなった牽制の弾幕をくぐり抜けた一夏が切りかかる。

セシリアは瞬時にビットから意識を戻し、一夏にライフルを構える。

その辺りはさすが代表候補生といったところ。切り替えが早い。しかし、彼女がトリガーを引くより先に、一夏が砲身に体当たりして照準を逸らす。

「なっ……!?! 無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きっ!」

反動を利用して距離を取り、左手を振るってビットに指示を飛ばす。

けど、これは二対一の勝負だぜ?

勝ちを急いで、一瞬でも俺を意識から外したのが運の尽きだ。

役目を終えた《大蛇》を収納し、右手に持ったままだった《天叢あめのむ雲》を両手に握り直す。

次いで、脚部スラスタを完全解放。急加速によるGに意識を引
つ張られながら、勢いを殺さずに刀を振り下ろす。

「なんですって!？」

表面を覆うエネルギー刃のおかげか、手応えは拍子抜けするほど
軽い。

後方に爆炎を置き去りにして、空中でくるりと反転。

セシリアに突撃する。

「くっ……!」

後退しながら再びビットをこちらにけしかけようとするも、

「この兵器。毎回お前が命令を送らないと動かないんだろ! しか
も——」

俺の後ろから飛び出した一夏が、さらに一機を撃墜する。

小さな光球が織りなす赤と白の乱舞を、白式の装甲が照り返す。

「その時、お前はそれ以外の攻撃をできない。制御に意識を集中さ
せているからだ。そうだろ？」

一夏の推理に、セシリアはギクリと硬直する。凶星か。

ビットはまだ二機も残っているし、彼女のシールドエネルギーは
まだかなりの量だ。

しかし、彼女の機体特性や、俺たちが格闘戦の間合いに入ろうとした時の顕著な反応から、俺はセシリアが格闘戦を苦手になっていると推察する。

勝機は、まだ十分にある。

＋＋＋

「二人とも、やるじゃん」

アリーナの客席は、今や黄色い歓声に埋め尽くされている。
無理からぬことだろう。

二対一というのが少し反則気味だが、今の二人は確かに格好いい。

「でも、油断しているとあっさり足元を掬われちゃうよ？」

その中で一人だけ、瑞癸だけは冷静な評価を下す。
その眼差しは、代表候補生の肩書きに相応しい、鋭く研ぎ澄まされたものだった。

＋＋＋

——獲った！

半分になったビットの弾幕は、さして意味をなさなかった。
その二つを、俺たちはすれ違いざまに斬り捨てて進撃する。

そしてそのまま、格闘装備の呼び出しすらしなかったセシリアの
懷に飛び込んだ。

この至近距離では、あの長大なライフルは扱えまい。

俺と同様に、セシリアの間合いに入った一夏も刀を振り下ろそうとしたその時、

「――かかりましたわ」

小さな呟きが耳に届いた。

その意味を理解したが、逃れる暇は与えられず――

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

スカート状のアーマーからせり出した二つの砲口から、ミサイルが放たれた。

白煙の尾を引いて迫り来るそれをどうすることもできないまま、俺たちは紅蓮の炎に包まれた。

＋＋＋

「――ふん。機体に救われたな、馬鹿者共め」

千冬が、誰に聞かせるでもなく呟いた。

その視線の先には、身を呈して親友をかばった自慢の弟の姿がある。

灰色の武者をかばうように翼を広げたのは白の騎士、その真の姿であった。

＋＋＋

——フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

目の前に投影されたウィンドウに、メッセージが流れた。

セシリアの策に嵌った瞬間、俺は本当に敗北を覚悟していた。ならば、少しでも勝ちの目がある桐葉を助けようと、無意識に二人の間に割って入っていた。

しかし——

「一夏……？」

茫然としている桐葉から漏れ出た声で、ハッと我に返る。慌てて、意識を「確認」と書かれたボタンに向けると、初めてISに触った時と同じように膨大なデータの奔流が頭の中になだれ込んできた。

次いで、外装にも変化が起こった。
今までに受けた実体ダメージが全て消え去り、デザインもより洗練されたものになっているのだ。

「これは……」

理解できる。ISが身体にしっくりと馴染む。

「ま、まさか……ファーストシフト一次移行！？ あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

そうか……そういうことか。

これでやっと、この機体は俺専用になった。

実体ブレードの柄をぎゅっと握り締める。

——近接特化ブレード・《雪片ゆきひら式型》。

桐葉のそれとは違い片刃の、反りのある日本刀。

何の因果か、こいつは千冬姉が世界一を勝ち取った際に振るって
いた武器と同じ名だ。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

そりゃそうだ。あの人は、いつだって俺を守ってくれてたんだ。

たった一人で、俺をここまで育ててくれた。

けど——

「俺も、俺の家族を守る」

守られるだけなんてまっぴらだ。

今は、俺にも力がある。

「……は？　あなた、何を言って——」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

「言うじゃねえか、一夏」

愉たのしくて堪たまらないといった風な表情で桐葉が声をかけてくる。

訳が分からないセシリアは疑問の声を上げるが、思いつきり無視。

「……は？　あなた、何を言っ——ああもう、面倒ですわ！」

セシリアは残っていたミサイルビット二機に指示を飛ばす。
あれほど苦戦したビットにも、今は脅威を感じない。

「決めるぜ、一夏！」

「おう！」

先ほどまでより数段動きが良くなった白式は襲い来るミサイルの嵐を軽々とすり抜ける。

「おおおおっ！」

俺の掛け声に呼応するが如く鎬しのの部分から左右に展開し、そこからエネルギー刃が姿を見せる。

最大加速のまま右側から懐ふところに飛び込み、渾身の力で刃を振り下ろした。

『試合終了。勝者——』

第十二話 戦いの後に（前書き）

水曜日に更新するとか言っておいて、一週間近く遅れてしまい申し訳ありませんでした。

第十二話 戦いの後に

「決めるぜ、一夏！」

「おう！」

俺の掛け声に応えた一夏は、一気に加速してセシリアとの距離を詰める。

もとより、一夏に良いところを持って行かせて、クラス代表を押しつけるつもりだった俺としては好都合だ。

しかし、敵も然る者。

一夏の機体の変化に戸惑いながらも、素早くビットに指示を出し迎撃の姿勢をとる。

撃ち出されたミサイルは六発。初見で追尾ミサイルだと分かっているのに、回避するよりも躲して突っ切った方が良い。

事実、機動性が格段に向上した白式を捉えることは出来ず、標的を見失ったそれらは俺の射撃で爆炎に変わる。

「おおおおっ！」

ビットも斬り捨てられ、今度こそ無防備となったセシリアの懐に一夏が飛び込む。

彼の意志に応えるが如く青白いエネルギー刃を生じた実体刀を、下段から放とうとする。

それで試合が決まると分かっているながら、俺も勢いのままにセシ

リアに突っ込む。

次に起こった展開は、その場の誰も予想していなかった。
いや、千冬さんだけは知っていたかもしれないけど。

渾身の一撃を叩き込んだ手応えが、ずっしりと両腕にかかる。
まさかの展開に、啞然とした表情の一夏、セシリア。
たぶん俺も同じような顔をしてることだろう。

「勝者——葛城桐葉」
かつらぎ きりは

おいおい、冗談は止してくれ。

＋＋＋

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの様か、大馬鹿者」
さま

酷い言われようだが、今回ばかりは弁護の仕様がな
い。なにせ、あんなだけデカイ口を叩いておきながら、セシリアに一発
も与えずにダウン。

トドメを一夏に任すつもりだったのに、計算違いもいいとこだ。

あの瞬間——

一夏はセシリアに斬り掛かった姿勢のままでいきなり停止した。
茫然としたまま固まるセシリアにトドメを刺したのは、後から飛
び込んだ俺だったという訳だ。

二対一のチーム戦なので、まあ勝ちと言えば勝ちだけど、なんか釈然としない。

「武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。身をもってわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いいな」

「はい……」

千冬さんの説教が一段落ついた所で、分厚い本を何冊も抱えた山田先生が近寄ってくる。

なんというか、足取りがかなり危なっかしい。

「えっと、ISは今待機状態になってますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

ドサドサつと重たい音を立てて机に落とされる規則書の山。

確か2ヶ月くらい前に読んだけど、とんでもないページ数だった気がする。

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

千冬さんのありがたいお言葉を受けて、ピットの入り口へ歩き出す。

そういえば、クラス代表は誰になるんだ？ 俺と一夏でもう一回試合でもすんのか。

それは、少し楽しみかもしれない。

「帰るぞ」

ピットの入り口では箒が待っていた。

「……………」

重たい身体を引きずって寮への道のりを歩いていると、箒はしきりに俺と一夏の顔を見比べる。

「な、なんだよ？」

先にしびれを切らした一夏が問いかけると溜め息を吐いて、

「役立たず」

と、のたまった。

姉には呆れられ、幼なじみには罵倒され……………今日の一夏は本格的にダサイな。

一応、親友としてフォローを入れてやるか。

「初心者の相手としては荷が重かったと思うし、まだまだこれからだよ」

「……………いや、負けは負けだ」

今回の試合、一夏にとっては敗北なのだろう。

結果だけ見れば俺たちの勝ちに違いないが、実際は二人がかりでも良いように遊ばれてただけだからな。

「一夏」

「ん、なんだ？」

まだ何か言葉を掛けるべきかと逡巡していると、箒から一夏に話しかけた。

「その、なんだ……悔しいか？」

「そりゃ、まあ。悔しいさ」

「そ、そうか。それなら、いい……」

そうだな。悔しさをきちんと受け止めてしっかりと前を向くことができれば、普通に勝った時より得る物が多い。

こいつは、たった一度の敗北でうじうじするような奴じゃないしな。

「あ、明日からは、あれだな。あ、ISの訓練もいれないといけいな」

「同感。今のままじゃ、格好がつかないしな」

箒の意図する所を悟った俺は、今度は彼女のフォローに回る。さつきから大忙しだ。

「で、結局箒は教えてくれるのか？　ISの操縦」

「む、無理にとは言わないぞ。なんなら、千冬さんに教えてもらった方がいいのではないか？」

せっかく一夏が乗ってくれたのに、矛先を変えようとするなよ。慌てて、一夏にアイコンタクト。不器用な女の子の気持ちにちゃんと気付いてやれ。

「いや、千冬姉はイヤがるだろ。それに、えこひいきっぽく見られてもイヤだしな」

「そ、それなら先輩にでも教えてもらってはどうか？ ほ、ほら。桐葉に教えてる先輩とか。一日の長いちじつ ちやうというものは、やはり重要だぞ」

予想通りと言うか、やはり唐変木の一夏にはアイコンタクトが通じず、話は段々と逸れてゆく……

「まあ、箒がイヤだって言うならそうしよ——」

「い、イヤとは言っていない！」

突然の大声に、俺も一夏も揃ってビクつく。

俺たちの状態に気付いた箒は、気恥ずかしさを紛らわすためか空咳をして、

「そ、その……コホン。い、一夏は私に教えて欲しいのだな……？」

「そうだな」

恐らく、二人の間でこの答えの受け取り方に齟齬そごがあるだろうが、それは言わぬが花だろう。

「そ、そうか……。そうかそうか。なるほどな。ふふっ、仕方がないな」

ほれ見ろ。一夏は他の女子より気が楽ぐらいの気持ちで言ったんだろうが、勘違いした筈はめっちゃくちゃ嬉しいがっている。

「はぁ……。どうなっても知らないからな」

「は？　なにが」

一応、忠告はしてやったが、この鈍感男に通じる訳もない。
この二人の間に入るのは、色々と気を回さなきゃならんのでとにかく疲れるな。まあ、イヤじゃないんだけど。

「よし、ではこの私が教えてやろう。特別にな」

ウキウキとした雰囲気隠しきれず滲み出している。

「では、明日から必ず放課後は空けておくのだぞ。いいな？」

「おう」

というか、瑞癸先輩はこれからも俺の訓練に付き合ってくれるのだろうか？

確か、兄貴に頼まれたのは基礎基本だけでも教え込んでやれ、って依頼だったらしいけど。

（一通りの動きは習得したからなあ……。そういえば、先輩にお礼言っとかないと）

代表候補生のセシリアに勝てたのは間違いなく先輩の指導のおかげだ。

きちんとお礼をするのが筋すじだろう。

そんなことを考えてると、急に真面目な顔をした一夏が口を開く。

「ところで箒」

「うむ、なんだ？」

それに続く言葉は、彼にしてみれば素朴な疑問だったのだろう。

「さっきからトイレに行きたいのか？」

いつになく上機嫌な箒を訝しんでの発言は、いささかならずデリカシーに欠けていた。

怒った箒がどこからとめなく竹刀を取り出し、馬鹿に天誅を下す。

そんなこんなで、三人で並んで歩く寮への帰り道は暖かく心地よいものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0058y/>

I S ――怪物殺しの英雄――

2011年11月29日19時52分発行